

新宿区「道と緑の課」と一緒に ～園庭環境の変身大作戦パート2～ 新宿区立西戸山幼稚園（東京都新宿区）

「緑の町・新宿」を目指した緑化運動のアイデア募集に夢をいっぱい書いて応募したところ○幼稚園フェンスのハンギング、○カメやザリガニと金魚が同じ池で一緒に住むことができる池の棲み分け、○擁壁の緑化→ツル植物を崖に這わせる試みが叶えられ、保護者との協働による作業で子どもたちの自然体験や自然環境の幅が広がっていった。子どもたちは池のカメや金魚、オタマジャクシの餌をあげながらそれぞれに気づいたことを話したり、金魚の数を数えたり、小さな蛙になって泳ぎだし、カメの住居のネットに止まっていたばくつとカメに食べられるのを見てビックリしたり「おーい、カメに食べられちゃうから逃げろ！」と真剣に蛙に知らせたりする姿など、自然界の厳しい節理を目の当たりにすることも度々あった。

（1）園庭を芝生にしませんか？

道と緑の課の申し出に、初めての経験をする私たちは何度も相談を重ねた結果、園庭の芝生化にチャレンジすることにした。芝生が育つための条件がいくつか出された。

- 芝生が根づくまでの間毎日30分以上水撒きをすること。
- 芝生の養生期間は、芝生の場所に入ってはいけない。

3月に芝生のマットを保護者や子どもたちと一緒に植え付け、腕がだるくなるほど水やりを続け、芝生の養生期間中はプランターで周りを囲って入らないように工夫する等…。5月の連休明けに、楽しみにしていた芝生にやっと入ることが出来るようになった。子どもたちの喜びの表現は様々であった。



4歳児 芝生の事例

<教師の思い> ・芝生を目で、体で、心でいろいろと感じてほしい。

<芝生について>

・平成16年の3月に在園児の親子で芝の苗植えをした。新入児はその様子は知らず、入園した時は、プランターに囲まれ、立ち入り禁止だった。4月下旬から緑が濃くなってきていた。

5月ゴールデンウィーク明け「園庭の芝生に、今日からデビュー！」

進級児は3月に芝植をしてから、新入児は入園した日から、園庭にプランターで囲まれたうす茶色から緑色になってきた芝の立ち入り禁止区域。暑く、裸足で砂遊びをしている幼児が多かった日。好きな遊びの片付けをし、教師が「ペンギンパラダイス、外でしようか」と裸足で芝生の上に駆けていく。「裸足でいいの？」「私も行く」と外で砂遊びをしていた幼児が駆けてくる。砂遊びでは裸足になることを嫌がっていた幼児も「僕も裸足になる」と自分から靴を脱ぎ、学級全員が裸足で踊った「ほわほわしてる」「きもちいい」という子、寝ころんで「あったかい」という子などがいる。「部屋に入ろう」と教師がいうと「キャー」と言って、逃げ出す幼児。それを見て皆が走り出し、芝生の上をしばらくグルグル走り回った後、保育室に帰ってきた。

裸足になっていい？ その日の弁当後

園庭に遊びに出た幼児の一人が「裸足になっていい？」と言う。「いいよ」と教師が言うと、それを見ていた幼児も次々に裸足になる。ダンスを踊る子、追いかっこをする子、寝ころぶ子。解放感を味わっているような笑顔いっぱいの子どもたちである。

芝生がいい！

好きな遊びでは、2～3人を除いて園庭で遊んでいた。片付け後、晴れた日で暑かったのではないかと思い、保育室でペンギンパラダイスをしようと、教師が音楽をかけようとする「芝生がいい！」と幼児が言う。その他の幼児も「芝生がいい！」と言う。「どうして？暑くない？」の問いかけに「気持ちいいんだもん」「暑くないもん」の答えが返ってくる。外に出るとほとんどの幼児が裸足。靴を履いていた幼児も、次々と裸足になる。

もうなくなっちゃった

雨がやんで晴れてきた。園庭に出て遊び出す幼児。ダンスをしていた幼児が、寝ころんで「あれっ、もうなくなっちゃった。雨、吸い込んだじゃった」と友達とごろごろ転がって遊んでいた。

あそこがいい

木陰でバトンダンスのためのバトンを教師と幼児5人ほどで作っていた。「音楽会ごっこの音楽がいいな」と幼児が言う。「どこでしょうか」「芝生がいい!」「暑くないかな」「大丈夫」これまでおとなしめで教師と一緒に遊んでいた幼児が、芝生の上でのびのびと自分なりの表現を楽しんでいる。それを見ていた3歳児が近くに来て「やりたい」と言ってくる。

お弁当、外で食べようか

お弁当を自分で用意して食べることに慣れてきたさくら組。「遠足みたいに外で食べてみる?」「食べる?」「芝生がいい!」外にござやシートを並べると、ドングリの木陰を選んで食べる子、日向を選んで食べる子、芝生の上に直接座って食べる子など様々である。「おいしいね」「遠足みたいだね」「気持ちいいね」「明日もここで食べたいね」など皆楽しそうに話をしながら食べていた。

シャワーだ! 気持ちいい!

とても暑い日、芝生の上でスプリンクラーを回す。朝の支度が終わって園庭に出てきた幼児は「シャワーだ!」と言いながら近づいてくる。しばらくすると裸足になり「キャー」といってスプリンクラーのしぶきの中を走り抜けていく幼児。それを見ていた他の幼児も裸足になり次々とスプリンクラーの中に入っていく。ペットボトルや牛乳パックなどをもってきて水遊びを始める幼児もいる。走り回る幼児もいる。芝生なので水で濡れていても転ばずに走れる。転んでも痛くないので笑いながらすぐに起きて友達と追いかけてっこをしていた。

<考察>

- ・初めて教師と触れた芝生の感触は、“気持ちいい”ものだった。素足で直接味わう心地よい感触は、また味わいたい、心に残る快感情となった。保育室の目の前に広がる緑色の芝生は、身近でいつでも素足、素手、体で気持ちよさを味わえる自然環境になったようだ。
- ・転んでも痛くない・雨をすぐに吸い込む・ほかほかと気持ちよい・緑が気持ちを和ませる芝生は、新宿御苑のように広い場をイメージさせ・思い切り体を動かしたくなり・開放的に自分を表現できる場として、幼児の動きをのびのびとしたものにしていく。
- ・芝生の良さ、幼児のかかわり方、以前の園庭の時との幼児の動きの違い、幼児に育った感性や創造性の芽生えなどを捉えていくことにより、芝生がある園庭の自然環境の生かし方をさらに工夫していけるようにすると良い。



<また緑になってきたよ>

昨年の緑の芝生をしまっている年長児が5人、冬の間、茶色く何もなくなった芝生の上にしゃがみこみ、下を向いておしゃべりをしている。すると急に「あったあ! 緑の芝生が生えてきたよお!」「また、ぜーんぶ芝生になるんだねえ」「芝生ってほわほわして気持ちいいんだよねえ、寝転がると温かいんだよねえ」としみじみと、そして楽しみにしながら話している。6月、緑が出てきた芝生の上を、3歳児が素足や靴下で嬉々として走り回っている。

みどころ

地域の情報や力を的確にキャッチし、園の生活環境を見直すことに結びついた実践です。「芝生の園庭」という魅力的な変身ではありますが、園庭という大きな環境が変わることは、子どもたちにとって生活や動きが大きく変わる大事件です。その大きな取り組みを、親子で進められたことは、「自分たちで作った庭」「自分たちで作り出せる幼稚園」という思いにもつながる感動体験になったと思います。

では、「その経験のない新入園児はどうだろうか?」子どもたちの自然な姿を受け止める先生方が、こうした視点を持ったかかわりをされたことで、新入園の子どもたちにとっても温かな、魅力的な「芝生の園庭」になっていったことが分かります。